

第14回 武田信玄生誕500年記念狼煙リレー



第 729 号
発行人 ● 豊丘村公民館
館長 市澤和宏
編集人 ● 長野県下伊那郡
豊丘村公民館報
編集委員会
0265-35-9066
印刷所 ● 龍共印刷株式会社

私たちの村
(11月1日現在 ※外国人を含む)
男 3,344人
女 3,366人
総人口 6,710人
世帯数 2,225戸

10月30日(土)

手作り甲冑を着て

今年の狼煙リレーは、信玄生誕五百年を記念して、初めて伊那谷から甲府までリレーを繋げた。各リレーポイントでは例年よりも趣向を凝らした取り組みが行われ、豊丘村のポイントでは、手作り甲冑での参加、豊丘太鼓の演奏、史学会による狼煙の説明が行われた。

寺垣外 貝原 亨

甲冑づくり教室と狼煙リレーに家族で参加させていただきました。

参加の切っ掛けは「ゆめあるて」を訪問した際、展示されていた公民館長さん制作の甲冑に五歳の息子が興味を持ったことでした。

教室は全二回。一回目は甲冑部材の切り出し作業です。公民館でも学習会を開催する等して広く呼び掛けているSDGsの理念に

沿って、材料となるのは各家庭から持ち寄った段ボールでした。公民館側で用意いただいた型紙に従って大小様々な五十以上の部材を切り出しました。

教室二回目は色塗り作業です。子ども達に希望の色を聞いたところ赤、金、黒とのことでしたので、塗料スプレーで甲冑を赤と金に着色し、黒色の紐で編み込むことにしました。編み込みは集中力を必要とするものでしたが、小学三年の娘が頑張ってくれました。

狼煙リレー当日は天候にも恵まれ、会場となった村民グラウンドからは伊那谷を一望することができました。今年には武田信玄生誕五百年記念とのことで、根羽村から甲府市までの二十七市町村六十六箇所を繋ぎます。息子



も手作り甲冑を纏っての参加となりました。豊丘太鼓の会の皆さんによる勇壮な演奏の中、十一時に根羽村をスタートしたリレーを受けて十二番目となる豊丘村が狼煙を上げたのはその僅か十五分後でした。

戦国時代、「狼煙」というものがいかに重要な情報伝達手段であったのかを改めて認識するとともに、今この瞬間、遠く離れた場所でも多くの人が様々な思いで「狼煙」を眺めていることを思うとき、感慨深いものがありました。

いつの間にか冬を感じる陽気になってきました。衆議院議員選挙やG20でも気候変動対策が大きな議題になっていました。地球温暖化という問題はなかなか身近な話題になりにくいかとも思います。しかし、省エネを心掛けて二酸化炭素の排出量を一人一人が抑えていくことは非常に大事なことです。冬、家の中が寒いのが嫌なのでリフォームを考えるのも一つの省エネです。しかし方法を間違えると逆効果もあります。きつとどこかで聞いたことがあ

秋の星空観測会

村民グラウンド 10月10日

忘れられない夜空

豊丘中学校三年

廣瀬乃亜(林里一)

稲葉優美(伴野原)

私たちは星空観測会に参加してたくさんのお話を学びました。はじめの三十分

ぐらいいは雲がたくさんあって星が見られるか不安でした。だんだん雲が無くなってきて、初めに見たのは「木星」です。木星は丸く地層

みたくなっていてとても

きれいでした。よく見るとその周りには三つの小さな星がありました。これは衛星星というのだと教えて頂きました。衛星は木星の周りを動くそうです。

次にアンタレスを見ました。アンタレスは赤い星で温度が低いです。星は赤いほど温度が低いそうです。他にも色によって温度が変わるそうです。

次に「土星」を見ました。肉眼で見ると普通の星に見

えましたが、天体望遠鏡で見ると丸の星にリングがありました。マンガに出てくるような感じで本当にすごかったです。土星があんな形をしているなんて初めて知りました。

次に「月」を見ました。先生方に「月にはクレーターがあつてのぞくと見えるよ」と教えてもらいました。それでのぞいて見ると本当に表面がぼこぼこして

いてはつきりと見えました。

とてもきれいでした。だんだん雲がはけていき上を見上げると星がたくさんありました。その中でも特に目を引いたのは天ノ川です。「天ノ川が豊丘で見える」とおどろ

いてみると「天ノ川はどこでも見られるよ」とおっしゃっていました。それを初めて知った時はビックリしました。もっとビックリしたのは、あと五十億年ぐらいで太陽は、破裂するそうです。それを

知った時は「怖い」と思いました。この会に参加して今まで見てきた夜空



(吉田 裕)

公民館報「とよおか」 掲載記事に対する 区長会の見解

豊丘村区長会長 北澤 貢

公民館報「とよおか」については、毎月楽しみに読んでいました。しかし、ここ数年の公民館報の一部にあまりにも偏った記事が目につきます。公民館（活動）は、学習と交流を通じて住民自治の意識と力量を

高めていく拠点として誕生したものです。そのためには、公民館報は一部個人の意見や主張のみを長きにわたり掲載するものではなく、豊丘村民のために公平中立な立場での意見を掲載するべきです。

特に最近の「蛇川下流域三六災害体験談」の記事は、筆者の一方的な考えや主張が相次ぎ掲載され、多くの村民の不安を誘発する文脈となっており、適切な状態ではありません。また、蛇川下流の住民に対し、いたずらに不安をあおり、自

分の意見に賛同させる意図も感じられます。下流域住民の多くは、JR東海の事業説明会や工事説明会に参加していないのが実情です

ので、工事の安全性に関する説明の内容を知らない村民にとって、掲載文の内容のみでは、当然に不安を感じると思います。

「リニア中央新幹線」工事は、国が認可し既に村内において始まっています。トンネル掘削により発生する土砂をどのように処分するのかは、以前より議論や協議がなされ、現在に至っています。掲載文の中に「小学校五年生でも判ることを理解していない」、「災害を増大させる残土処分工事を止めることが得策」などの文章が書かれています。豊丘村民、特に子供たちに迷惑がからぬ方法が他にあるのでしょうか。無いから本山や戸中地籍へ安全

に盛土することを決めたのです。

蛇川上流の本山地縁団体にリニアトンネル発生土を置くことは、平成二十四年頃から本山関係者及び関係者が、豊丘村・JR東海・長野県等多くの関係者と協議を重ね、決定したことです。その頃からの会議資料・意見等を見返すと、①トンネル発生土を村外に持ち出すには豊丘村の中心地をダンプカーが数十万台通行し、村民や登下校時の子供たちが事故に遭う危険が増大する。②膨大な数のダンプカー等の通行により、村民の日常生活が破壊される。③七年以上にわたり、このような状況が続くことは

豊丘村にとって非常に危険なことである。④JR東海は、「発生土置場工事完了後は地権者に管理をしてもらう」というが、広大な土地の広大な水路等を完全に管理することは地権者にはできないため、盛土に係した全対象土地をJR東海に買収してもらう。⑤発生土置場の工事方法については、長野県が設計内容や施工の状況をチェックし、事故発生がないよう指導監督する。などの経過があります。また、豊丘村リニア対策委員会としても、様々な危険の回避を考慮して決定したものです。

リニア中央新幹線建設工事は、地域の発展のために国が認可した新規鉄道建設

蛇川下流域三六災害体験談(30) 位置エネルギーの蓄積・増大は、災害を引き起こす運動エネルギーになる

原 章（古畑）

☆物理学者で随筆家の寺田寅彦は、随筆集 第五巻 天災と国防の中に次のような事を書いています☆
「『いつも忘れがちな重要な事項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実である。』」



寺田寅彦氏

文明が進むに従って人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そうして、重力に逆らい、風圧水力に抗するようないろいろの造営物を作った。そしてあつたれば自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の群衆のように、自然があらわれ出して高樓を倒壊せしめ堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす。その災禍を起

こさせたもの起こりは天然に反抗する人間の細工であるといつても不当ではないはずである。災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ、いやが上にも災害を大きくするよう努力しているのはたれあろう文明人そのものなのである。」

☆この言葉を本山残土工事で解釈すると…☆
「重力に逆らい」は、もともと伊那山地の地中深く

にあった残土を本山まで高く運び上げることです。そのことで、「災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ」そのエネルギーが働けば「堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす」と、びつたり当てはまります。この自然原理に基づく先達の警句にしっかり耳を傾けることで大変重要ですよ。

（続く）

夢を実現しゆりの第二人生

シリーズ「元氣な高齢者」(85)

吉山知利さん
八十九歳
中平在住



昭和七年に現在地で、九人きょうだいの次男（男五女四）として生まれた。兄は戦争から帰還し、暫くは会社勤めしていたが戦争の影響で体調が万全とは言えない中、残念にも三十年前に亡くなったので実質的には長男の役割を担っていた。

家は蚕、梨、米、野菜等を手掛ける農家で、知利さんは小学生高学年から家業を手伝っていたが、密かな夢を抱いていた。世の中は高等科から中学に切り替わる過渡期であり中学三年を卒業後、その夢を実現し更に家計を助ける意味合いもあり、当時憧れの職業であった大工になるべく田村の片桐さんに弟子入りした。

カンナ、鋸、ノミなどの基礎技術を学んだ後、暫くして市田駅近くのマルキョウ内にあった仕事場で、本格的な修行に入った。始めは小間使いであったが、やがて主要部分も任されるようになった。

二十八歳の時、叔父さんの紹介で壬生沢出身で四歳下の千栄さんと結婚した。千栄さんは義父母と一緒に農業に専従し外へ働きに出ることはなかった。

知利さんはアルコールが好きで強い。若い頃から弟子を連れて飲み歩き飯田まで足を伸ばすのは珍しくなかった。どんなに飲んでも決して乱れず、ちゃんと帰宅した。千栄さんは特に愚痴をこぼすことも無く見守っていた。今でもコップ一杯の晩酌を欠かさない。

特別に打ち込んだ趣味はないが、カラオケで好きな唄（岡晴夫、北島三郎他）を思い切り歌うのが何よりの気分転換だ。また時々出向く「憩いの家」は安らぎの場になっている。テレビは主にニュースを見、他にスポーツものの相撲、野球、オリンピック等が好きだ。健康面では胃を少々患い時々医者に見てもらったが、他には特に気になることは無い。脚力、聴力、視力のいずれも問題なく、家の近くを散歩、新聞は細かく目を通すなど健康体である。食事は好き嫌い無く、何でも美味しく頂ける。公務

では区委員、神社委員、農業委員、消防団員、小学校のPTA会長などを勤めた。大工業を辞めてからは農業に専念しているが、体力的に厳しくなってきたため田んぼ及び果樹園は若い人に貸している。柿は約二反歩の広さを有するが、極力応援は頼まず夫婦だけで対応している。所有する山では、以前は松茸が取れたが最近では減ってしまい楽しみが薄らいでしまった。

仕事柄、車の運転免許を取るのには早かったが、以来現在でも近場に限り運転している。最近の高齢者による事故を見るに付け改めて気を引き締めている。

現在は千栄さん、娘さんとの三人暮らしであるが飯田近辺に住む孫が三人、曾孫が二人おり、時々遊びに来てくれるのが楽しみだ。きょうだいの内、健在者は六人となったが、時々連絡を取り互いの健康を気遣い励まし合っている。

文責：桐崎長一

第51回夜間ソフトボール大会 コロナ禍により大会途中で中止

第五十一回夜間ソフトボール大会は、五月二十七日から行なわれ、参加十三チームが熱戦を繰り広げていたが、新型コロナウイルスの爆発的な拡大により九月十日をもって中止となってしまった。

四月二十四日の開会式では、夜間ソフト五十周年記念事業として、長年出場しているチーム・個人の表彰を行なった。また、登録チー



夜間ソフトボール連盟 事務局長 武田 徹

ム全員に記念のタオルを配布した。

リーグ戦は後期の数試合と、雨天順延試合数試合を残すところまで消化してきたが、感染拡大により、これ以上の継続は困難と考え、代表者を開催して中止を決定した。

中途半端な形で本年度の大会は終了したが、来年は是非すべての日

～シリーズ～ 豊丘の自然
No.214

アサギマダラ
（マダラチョウ科）



マーケティングされたアサギマダラを高森町で二頭捕獲。一頭目（10/14）は「ミカワ・10/4・Uno255」。二頭目（10/20）は「KMR・10/5・OSM776」。四方さんをお願いして調べてもらう。すると、幸田町（愛知県）、小諸市とのこと。九十九kmを十日間で北上、百六十三kmを十五日間で南下したことになる。

ミスマイマイでは断念したが、やはり個体識別としての調査、魅力的だ。町内での動向を付け加える。二・一kmを八日間、十七日間で移動した個体もいれば、同一場所に六日間、四日間、三日間、二日間留まっていた個体もいた。長距離の移動だけが話題になるが、南下・北上、留まるなど千差万別。まさに多様性そのものである。

（山田 拓）

競走、宝引き、借り物競走、個人メドレー、自治会対抗五種目（縄結び、人間スラックアウト、大漁ゲーム、椅子取りゲーム、貯蓄リレー）、計十種目で体力・気力・技・運を競



こうして和気あいあいのうちに競技は終了。十二時少し前閉会となりました。ワクチン接種が進んでいるとは言え、まだまだ油断できる状況ではなく、声援や歓声を控え節度ある行動に努めつつも、手拍子高くマスコ越しに笑みがこぼれ、心ははちきれんばかりでした。楽しく心温まる運動会となり、久し振りに「つながり」を実感したひとときではなかったかと思えます。開催に当たり、分館役員で議論し熟慮したのは、いかにしたら実施できるかということ。安易な中止は分館の存在意義を問われかねません。今回の運動会では競技種目を絞り、時間を短縮、午前中で終えることとしました。なるべく接触しない、物を共有しないように工夫をし、種目を選定しました。参加者を飯田下伊那在住者に限定する一方で、ワクチン接種の進捗状

況等を踏まえ、感染者による中止の条件を豊丘村在住者とし、通常の感染対策を徹底したことは言うまでもありません。特定の地域の人々を「必ず」役割を分館が担っていることは、前号で壬生編集委員長が記したとおりです。必ず「つながり」があつてこそです。ノウハウの継承もさることながら、「つながり」を念頭に今後も分館の行事に取り組んでいきたいと思ひます。

佐原地区運動会（佐原大運動会）が十月二十四日（日）、村長・公民館長を来賓に迎え、赤松林運動公園グラウンドで行なわれました。昨年は新型コロナの影響で中止となったため、二年振りの開催となりました。当日は、秋晴れの運動会日和。準備体操で体と心をほぐし、競技を開始。個人五種目（宝ひろい、パン食い競走、宝引き、借り物競走、個人メドレー）、自治会対抗五種目（縄結び、人間スラックアウト、大漁ゲーム、椅子取りゲーム、貯蓄リレー）、計十種目で体力・気力・技・運を競

い合いました。保育園児以下で行なわれた「宝ひろい」は、幼いながらも競い合う姿やあどけなさが微笑ましく、和まされました。「縄結び」「人間スラックアウト」「大漁ゲーム」は運に左右される競技で、神だのみ運まかせに一喜一憂。運不運が織り成す様は溜め息と笑いを誘っていました。

こうして和気あいあいのうちに競技は終了。十二時少し前閉会となりました。ワクチン接種が進んでいるとは言え、まだまだ油断できる状況ではなく、声援や歓声を控え節度ある行動に努めつつも、手拍子高くマスコ越しに笑みがこぼれ、心ははちきれんばかりでした。楽しく心温まる運動会となり、久し振りに「つながり」を実感したひとときではなかったかと思えます。開催に当たり、分館役員で議論し熟慮したのは、いかにしたら実施できるかということ。安易な中止は分館の存在意義を問われかねません。今回の運動会では競技種目を絞り、時間を短縮、午前中で終えることとしました。なるべく接触しない、物を共有しないように工夫をし、種目を選定しました。参加者を飯田下伊那在住者に限定する一方で、ワクチン接種の進捗状



公民館学習会バスハイク 飯田下伊那を巡る旅

十一月二日にバスハイクが行われた。昨年に続き「安曇野の歌碑を巡る旅」を年度当初計画していたが、コロナ禍で今年も変更せざるを得ないこととなり、最も安全な地元を知るコースとなった。当日は、天気にも恵まれ紅葉の山々を眺めることができた。

当初十月に実施を予定していたが、九月まで感染者が多く、出掛けることができない状況ではなかったため、ひと月延ばすこととした。ちょうど柿取りの時期と重なってしまったため、参加者は二十六名と少なかった。川本喜八郎人形美術館では、学芸員より説明を受け、特に「三国志」の人形の素晴らしさを実感できた。

次に、阿智村産業振興公社より循環型農業と、はつらつと農業に従事されている方のお話をお聞きして、元気を分けてもらった。

治部坂高原の素晴らしいもみじの紅葉では、もみじの葉を手にし、「お父さんのお土産」とおっしゃるか、わいらしい方もいた。平谷新野千石平の山々を車中より眺め、そらさんぽでは、夕暮れに走る「特急伊那路」を写真に収めることができた。

灯台下暗し。地元にも初めて訪れる方もおり、満足いただけたのではないかと思う。（公民館事務局 松村佐織）



治部坂高原にて



前号で補正の方法をやったのですが実際に現地で行ってみたいとわかりませんので、今回は実際に時間常も含め操作を教えてください。●補正とは目の前の景色の濃さを適正にするため、カメラに表現するかは自分で決めることです。左の写真は生徒さんの写真ですが、補正していないことから

柿の葉が少し暗くなっています。絞りももう少し絞ると柿と蔵壁がシャープになるでしょう。ここで色温度をオートから日陰モードにして、より夕陽の色を強調しています。この手法で右写真を二人で挑戦しました。ここでカメラ任せに撮影された生徒さん。引き締まりに欠けてしまふフラットな味となりました。そこで自分は影を強調するため少し暗めに露出の補正をかけています。手前の花を添えてより立体表現をしました。



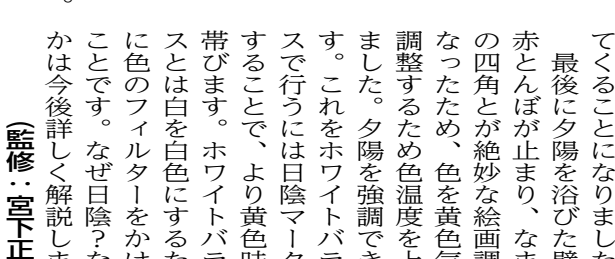
絞りF4.5 1/200 ISO250 補正なし



絞りF5.6 1/200 ISO400 補正+1.7



絞りF3.3 1/1250 ISO160 補正なし



絞りF6.3 1/500 ISO100 -0.7

左の写真は白いなまこの壁を普通に撮るとグレーになるため、明るく補正をかける必要があります。こうすることにより手前の山桜の葉の色も色味をみせてくれるのです。壁に落ちた桜の枝の影も出てくることになりました。最後に夕陽を浴びた壁に赤とんぼが止まり、なまこの四角とが絶妙な絵画調になったため、色を黄色気味調整するため色温度を上げました。夕陽を強調できました。これをホワイトバランスで行うには日陰マークにすることで、より黄色味を帯びます。ホワイトバランスとは白を白色にするために色のフィルターをかけることです。なぜ日陰？なのは今後詳しく解説します。（監修：宮下正弘）